

県営ほ場整備事業（粟津川地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

珠洲市

粟津カンジャバタケ遺跡

2006

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

あわづ
粟津カンジャバタケ遺跡

2006

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は粟津カンジャバタケ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は珠洲市三崎町粟津地内である。
- 3 調査原因は県営ほ場整備事業（粟津川地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は(財)石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成15(2003)年度から平成17(2005)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査・出土品整理・報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。
- 6 現地調査は平成15(2003)年度及び平成16(2004)年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。
 - (1)平成15(2003)年度
期 間 平成15(2003)年10月14日～同年11月7日
面 積 200㎡
担当課 調査部調査第2課
担当者 本田秀生(調査専門員)、谷内明央(主事)
 - (2)平成16(2004)年度
期 間 平成16(2004)年4月27日～同年5月31日
面 積 580㎡
担当課 調査部調査第2課
担当者 金山哲哉(主任主事)、和田龍介(主事)、安中哲徳(主事)
- 7 出土品整理は平成17(2005)年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書刊行は平成17(2005)年度に実施し、調査部調査第2課が担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は安中哲徳(調査部調査第2課主任主事)が行った。
 - 第1章：谷内明央(調査部調査第2課主事)
 - 第2章：谷内明央、稲垣淳平(調査部調査第2課嘱託)
 - 第3章：谷内明央
 - 第4章 第1節：安中哲徳、谷内明央
 - 第4章 第2節：森山佳(調査部調査第2課嘱託)
 - 第5章：谷内明央
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。
石川県農林水産部農業基盤整備課、大藤雅男、大安尚寿、奥能登農林総合事務所(旧珠洲農林総合事務所)、珠洲市教育委員会、平田天秋(五十音順、敬称略)
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1)方位は磁北である。
 - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海拔高)による。
 - (3)出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査の概要	5
第4章 遺構と遺物	7
第1節 遺構	7
第2節 遺物	17
第5章 まとめ	27

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (S = 1 / 2,000, S = 1 / 6,000)	2	第10図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(4) (S = 1 / 60)	13
第2図 遺跡の位置図	2	第11図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(5) (S = 1 / 60)	14
第3図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)	4	第12図 遺構断面図 (S = 1 / 40)	16
第4図 調査区割図 (S = 1 / 240)	6	第13図 平成15・16年度調査区出土遺物(1) (S = 1 / 3)	19
第5図 平成15年度調査区平面図・北壁土層断面図(1) (S = 1 / 60)	8	第14図 平成15・16年度調査区出土遺物(2) (S = 1 / 3)	20
第6図 平成15年度調査区平面図・北壁土層断面図(2) ・東壁土層断面図 (S = 1 / 60)	9	第15図 平成15・16年度調査区出土遺物(3) (S = 1 / 3)	21
第7図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(1) (S = 1 / 60)	10	第16図 昭和50年度調査区出土遺物(1) (S = 1 / 3)	22
第8図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(2) (S = 1 / 60)	11	第17図 昭和50年度調査区出土遺物(2) (S = 1 / 3)	23
第9図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(3) (S = 1 / 60)	12	第18図 昭和50年度調査区出土遺物(3) (S = 1 / 3)	24

表 目 次

第1表 平成15・16年度出土土器観察表	25	第3表 昭和50年度出土土器観察表	25
第2表 昭和50年度、平成14・16年度出土土製品・ 石製品観察表	25		

図版目次

図版1 平成15年度調査区①
図版2 平成15年度調査区②
図版3 平成15年度調査区③
図版4 平成15年度調査区④
図版5 平成15年度調査区⑤
図版6 平成15年度調査区⑥
図版7 平成16年度調査区①
図版8 平成16年度調査区②
図版9 平成16年度調査区③
図版10 平成16年度調査区④

図版11 平成16年度調査区⑤
図版12 平成16年度調査区⑥
図版13 平成16年度調査区⑦
図版14 平成16年度調査区⑧
図版15 出土遺物①
図版16 出土遺物②
図版17 出土遺物③
図版18 出土遺物④
図版19 出土遺物⑤
図版20 出土遺物⑥

第1章 調査に至る経緯と経過

調査の経緯 県農林水産部農業基盤整備課（旧農地整備課。以下、農業基盤整備課）は農地の生産性を向上させるために、農地・用排水路・農道等の整備を一体的に行う、ほ場整備事業を実施している。一方、県教育委員会文化財課（以下、文化財課）は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、事前に事業内容の照会を受けている。農業基盤整備課は珠洲市三崎町粟津地内に、ほ場整備事業を計画した。しかし工区内には周知の埋蔵文化財包蔵地である粟津カンジャバタケ遺跡が存在していた。事業内容の照会を受けた文化財課は埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直しを農業基盤整備課に要請し、双方協議の結果、工事の影響が遺跡に及ぶ箇所を発掘調査対象とすることで合意がなされた。農業基盤整備課は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文）に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第2課が担当した。

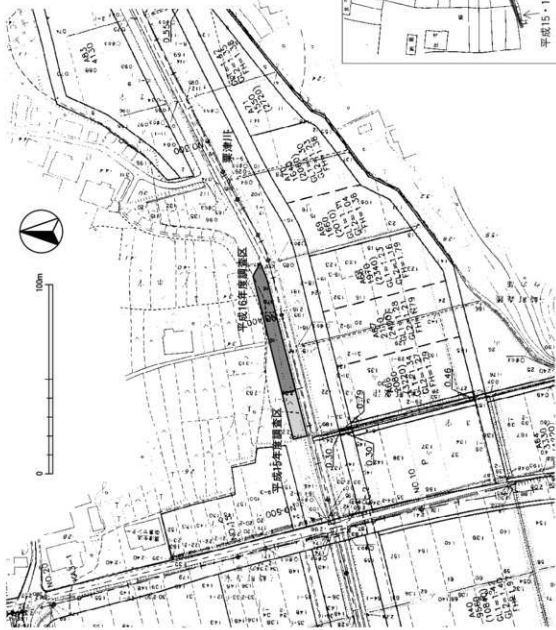
調査の経過 平成15年10月9日に奥能登農林総合事務所（旧珠洲農林総合事務所。以下、農林）・文化財課・埋文との間で現地協議が行われた。農林と地元の調整が難航した結果、調査着手が遅れ、依頼面積780㎡のうち200㎡を調査し、残りは来年度に調査することとなった。10月14日に表土除去を行い、16日から作業員が調査に参加した。遺構検出の結果、古代の土坑と中世の溝を確認した。小穴を多数検出したが柱穴等の証拠を得るには至らなかった。また粟津川沿いの調査区南半は旧粟津川の流路であった。狭い部分であるが検出面として捉えた層からは弥生土器が出土しており、トレンチを入れた結果、検出面と同質の粗砂層が厚く堆積していた。土は粗砂質でしまりがなく、遺構検出・掘削は予想以上に進捗したが、写真撮影で清掃するたびに上端が削られ壁面も崩落しやすい状況であり、完掘した遺構については早めに実測しなければならなかった。21日に遺構掘削、27日に写真撮影、28日に実測が完了した。調査区東端の立木3本については、元地権者の要望で調査区内外の境に移植した。その作業に係る立会いと器材撤収を11月7日に行った。

平成16年4月23日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われ、去年度の残り580㎡分を調査することとなった。27日に表土除去を行い、5月6日から作業員が調査に参加した。遺構検出の結果、中・近世の土坑を確認した。土坑は方形を呈しており、骨片が出土していることから墓の存在を想定できた。15年度と同様の少穴や流路も検出しており、流路からは縄文～近・現代と多時期にわたる遺物が出土している。また検出面として捉えた層からは縄文土器が出土した。21日に遺構掘削・写真撮影、25日に実測が完了した。28日に現地引渡し、29日に器材撤収を行った。

平成17年度、文化財課は平成15・16年度調査分の出土品整理と報告書刊行を埋文に委託した。出土品整理は企画部整理課が担当し、報告書刊行は調査部調査第2課が担当した。



第2図 遺跡の位置図

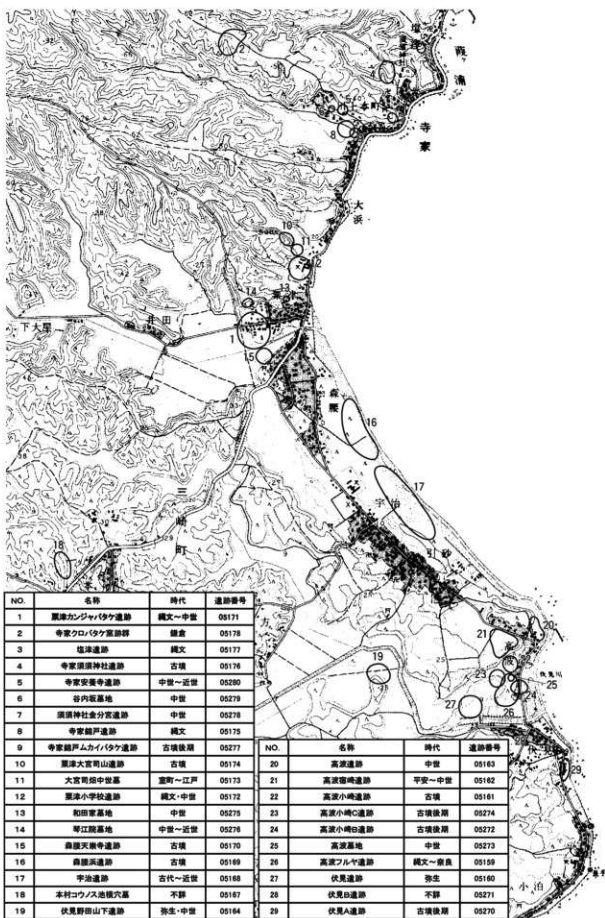


第1図 調査区位置図 (S=1/2,000, S=1/6,000)

第2章 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と地理的環境 粟津カンジャバタケ遺跡は石川県珠洲市三崎町粟津地内に所在し、遺跡の立地する三崎町粟津は珠洲市の北東端、粟津川河口付近に位置する。珠洲市は能登半島の北東端に位置し、北は日本海、東・南は富山湾に面し、西は輪島市・能登町と接している。市の北部域は宝立山を最高峰とする山地が大部分を占めており、その海岸線は外浦と呼ばれる。山地が直接海に迫って比高の大きい急斜面や急崖の良く発達する岩石海岸からなり、その岩場の多い海岸線は美しい景観を見せてくれている。また、市の東・南部域は高度300m以下の丘陵地が大部分を占め、東部域には海成段丘の顕著な発達が見られる。東・南部域の海岸線は比較的なだらかな砂浜海岸で内浦と呼ばれる。内浦には広域ではないが平野部が見られる。小規模な河川がほとんどで大きな河川は見られない。

歴史的環境 珠洲地域での最も古い遺物として、旧石器時代晚期から縄文時代草創期にかけての尖頭器が三崎町雲津地内で採取されている。縄文時代には塩津遺跡(3)・寺家錦戸遺跡(8)・粟津小学校遺跡(12)・高波フルヤ遺跡(26)が存在し、中でも高波フルヤ遺跡は縄文時代前期から奈良時代までの長期にわたる遺跡である。弥生時代には伏見野田山下遺跡(19)・高波フルヤ遺跡(26)・伏見遺跡(27)等がある。古墳時代の遺跡としては寺家須須神社(4)・粟津大宮司山遺跡(10)・森腰天崇寺遺跡(15)・森腰浜遺跡(16)・高波小崎遺跡(22)・高波小崎C遺跡(23)・高波小崎B遺跡(24)・寺家錦戸ムカイバタケ遺跡(9)・伏見A遺跡(29)等が存在する。このころから土器製塩が始まり、明治時代に至るまで製塩活動が盛んに行われていた。市域でも特に高波・伏見・粟津など三崎町沿岸部に製塩遺跡が集中している。古代の遺跡には宇治遺跡(17)・高波宿崎遺跡(21)・高波フルヤ遺跡(26)がある。中世の遺跡としては寺家クロバタケ窯跡群(2)・寺家安養寺遺跡(5)・谷内坂墓地(6)・須須神社金分宮遺跡(7)・大宮司畑中世墓(11)・粟津小学校遺跡(12)・和田家墓地(13)・琴江院墓地(14)・宇治遺跡(17)・伏見野田山下遺跡(19)・高波遺跡(20)・高波宿崎遺跡(21)・高波墓地(25)等が存在する。この時代から須恵器の系譜を引く珠洲焼の生産が始まる。確認できる最古の窯は寺社カメワリ坂1号窯といわれ、寺家クロバタケ窯跡群をはじめ、市域全体では約20基の窯があるとされている。寺家クロバタケ窯跡群は一箇所に多数の窯が集中しており、珠洲焼の甕・壺・鉢が多数出土している。平成17年度に県埋文センターによって発掘調査が行われた粟津小学校遺跡からは中世の集落跡や墓が確認されている。なお、粟津カンジャバタケ遺跡は昭和50年度に石川考古学研究会と金沢大学考古学研究会が主体となって発掘調査が行われており、1976年に刊行された『珠洲市史』第一巻資料編自然・考古・古代にその成果が掲載されている。



NO.	名称	時代	遺跡番号
1	粟津カンジャバツケ遺跡	縄文～中世	05171
2	寺家クロバツケ遺跡群	鎌倉	05178
3	桂津遺跡	縄文	05177
4	寺家須原神社遺跡	古墳	05176
5	寺家安養寺遺跡	中世～近世	05280
6	谷内堰基地	中世	05279
7	須原神社倉分室遺跡	中世	05278
8	寺家鎌戸遺跡	縄文	05175
9	寺家鎌戸ムカイバツケ遺跡	古墳後期	05277
10	粟津大宮山遺跡	古墳	05174
11	大宮岡畑中世墓	室町～江戸	05173
12	粟津小学校遺跡	縄文・中世	05172
13	和田家基地	中世	05275
14	等江跡基地	中世～近世	05276
15	森原天養寺遺跡	古墳	05170
16	跡原浜遺跡	古墳	05169
17	宇治遺跡	古代～近世	05168
18	本村コウノス池根穴墓	不詳	05167
19	伏見野田山下遺跡	弥生・中世	05164

NO.	名称	時代	遺跡番号
20	高家遺跡	中世	05163
21	高家御崎遺跡	平安～中世	05162
22	高家小崎遺跡	古墳	05161
23	高家小崎C遺跡	古墳後期	05274
24	高家小崎D遺跡	古墳後期	05272
25	高家基地	中世	05273
26	高家フルヤ遺跡	縄文～奈良	05159
27	伏見遺跡	弥生	05160
28	伏見B遺跡	不詳	05271
29	伏見A遺跡	古墳後期	05270

第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第3章 調査の概要

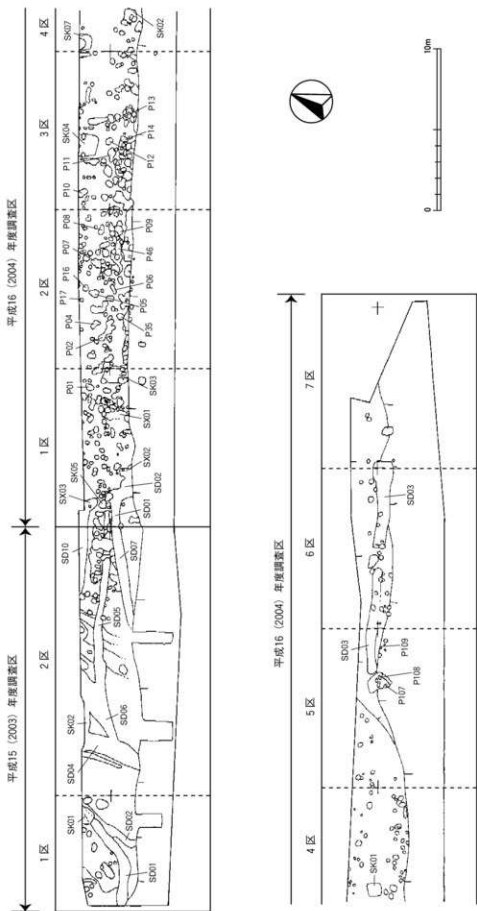
調査の概要 調査面積は長さ100m・幅は8m（東端は若干縮まる）の計780㎡で、平成15年度は200㎡、平成16年度が580㎡である。調査区は粟津川左岸に沿うようにして東西方向に伸びている。グリッドは調査年度ごとに設定した。平成15年度は実測用の杭を任意に打ち、西から順に1～2区まで設定して遺物取上げを行った。平成16年度は昨年度の東側に10m間隔で杭を打ち、西から順に1～7区まで設定して遺物取上げを行った。遺構番号も調査年度ごとに付しており統一はしていない。調査区割図（第4図）は元々、平成15・16年度の2箇所に分かれていた図面を合成したものである。

調査区南半で検出した旧河道の面、すなわち黄橙色粗砂層（後述のV層）で遺構検出を行い、古代の土坑、中世の溝、中・近世の土坑墓などを検出した。また、小穴を多数検出し、弥生時代～中世までの遺物が出土しているが、調査着手直前まで調査区内には大規模な稲架が立っていた状況であり、攪乱穴に遺物が混入した遺構も相当数あったと想定される。埋土による時期差も認識しづらく、柱穴と攪乱穴を区別できるような証拠を得るには至らなかったものも多い。遺構は調査区東端で減少するが、これは遺跡の東限を示すものと判断した。遺物は縄文時代～近・現代までのものが出土した。

基本層序 土層はI～Vの大きく5層に分かれる。土色は調査年度で統一されていない。そこで写真や図面を参考にしつつ、年度ごとの層位がどのような土質を主体にしているかを基準に分層した。

平成15年度調査区（第5・6図）ではI表・耕土（1・2・24・25層）・II褐色粗砂（3・36・40層）・IV黄褐色粗砂（4・14・15・37層）・V黄橙色粗砂（遺構検出面）の4層に分層した。遺構ではSK01、SD04・05・10がV層、SD06はII層に属する。ただ、削平されているがSK01は出土遺物の時期や遺構の切合いから判断して、古代の遺構と想定している。平成16年度調査区（第7～11図）ではI表・耕土（2・7・8・12・24・25層）・II暗褐色粗砂（41・56層）・III黄褐色粗砂を含む暗褐色粗砂（30・57・98・102層）・IV黄褐色粗砂（11・17・19・20・31・32・36・37・39・40・59・100層）・V黄橙色粗砂（遺構検出面）に分層した。遺構ではSK04がII層、SK07はIII層に属する。

以上の結果をふまえて、遺構から出土した遺物の時期を基に時期を判断すると、SK04・07が中・近世でSD05は中世と想定できることから、V層上面が中世、IV層以上はそれより新しいことがわかる。V層は縄文時代～弥生時代の土器を包含している。したがってV層上面で検出した遺構は縄文時代ないし弥生時代の流土（水流というよりはむしろ風による粗砂の被覆）の上から構築されたものと考えられる。壁土層で観察できる小穴断面の切合いから生活面をより細かく区分けすることも可能であるが、各層とも異時期の土器を混入しており、これ以上の時期推定はできなかった。



第4図 調査区割図 (S = 1/240)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺 構

検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出高からの深さを示す。平成15年度調査区では溝(SD)を主に、平成16年度調査区では土坑(SK)について説明を加える。

平成15年度調査区

SK01(第5・12図) 1区に位置し、SD01に切られる。隅丸方形を呈すると思われ、検出高1.78m・長辺80cm以上・深さ39cmを計測する。埋土は黒褐色粗砂を基調とする。坑底は平坦に仕上げられ、形状も上端同様方形を呈する。須臾器が出土し、時期は古代と判断した。

SD01(第5・12図) 1区に位置し、SK01を切り、SD02に切られる。検出高1.78m・幅50cmを計測する。深さは25cmで、溝底は北東から南西へと傾斜する。埋土は暗褐色粗砂を基調とする。遺物は出土していないが、遺構の切合いから時期は中世と判断した。

SD04(第5図) 2区に位置し、SK02・SD03を切る。検出高1.8m・幅80cmを計測する。深さは20cmで、溝底は北から南へと傾斜する。埋土は暗褐色粗砂を基調とする。土師器の椀(19)と珠洲焼が出土し、被熱した珪藻土も少量出土している。時期は中世である。

SD05(第5・6・12図) 2～3区に位置し、SD09を切り、SD06に切られる。検出高2m・幅50～60cmを計測する。深さは20cmで、溝底は東から西へと傾斜する。埋土は茶褐色粗砂を基調とする。他の溝は旧栗津川へと伸びているが、SD05はそれと併走するようにして掘り込まれていた。

SD07(第6図) 2区に位置する。検出高2m・幅60cmを計測する。深さは50cmで、溝底は東から西へと傾斜し、埋土は茶灰色粗砂を基調とする。平成16年度1区SD01とつながる。

SD10(第6図) 2区に位置する。検出高2.01m・幅60cm以上を計測する。深さは30cmで、溝底は概ね平坦である。埋土は黒褐色粗砂基調でSK01と似る。当初は竅穴状遺構と想定していたが、平成16年度1区SX03・SD02とつながることから溝とした。埋土から判断して中世以前の可能性がある。

平成16年度調査区

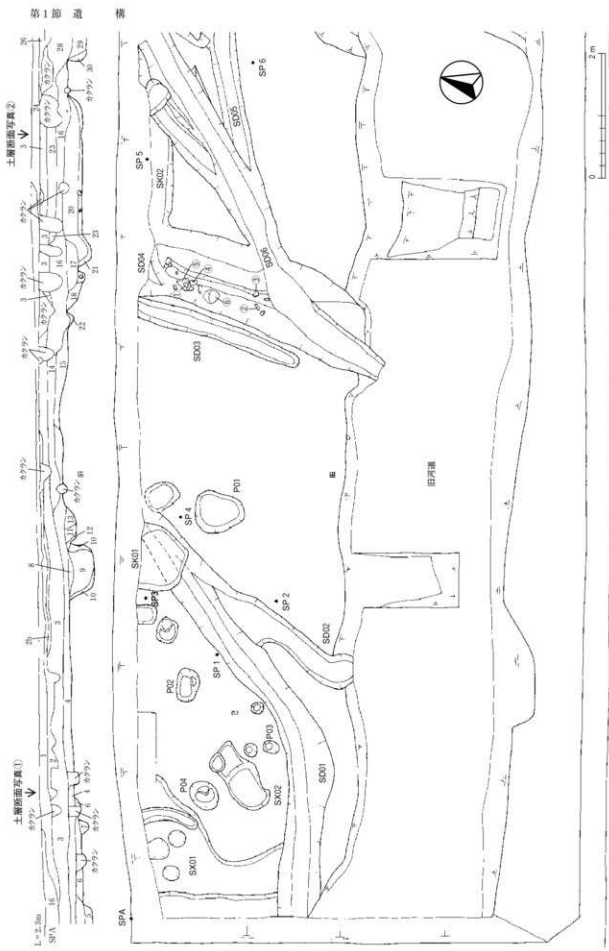
SK01・02・04・07からは骨片が出土しており、中・近世の土坑墓である可能性が高い。

SK01(第9・12図) 4区に位置し、隅丸方形を呈する。検出高2.18m・1辺90cm・深さ20cmを計測する。埋土は黒褐色粗砂を基調とし、底面に3mm程度の炭化物層が堆積していた。

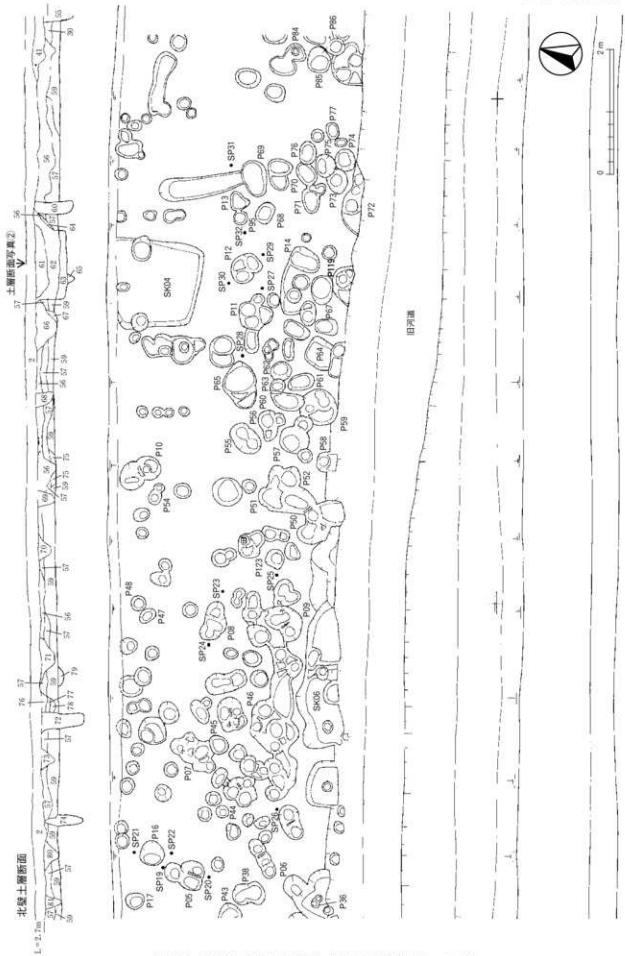
SK02(第9・12図) 4区に位置する。歪んだ隅丸方形を呈し、3基の小穴に切られる。検出高2.2m・1辺80cm・深さ13cmを計測する。埋土は黒褐～暗褐色粗砂を基調とする。

SK04(第8図) 3区に位置し、歪んだ隅丸方形を呈する。検出高2.4m・1辺1.35m以上・深さ19cmを計測する。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粗砂を基調とする。人為的に埋め戻されており、最下層では炭粒を多く含む。土層観察の結果、時期は近世以降と判断した。

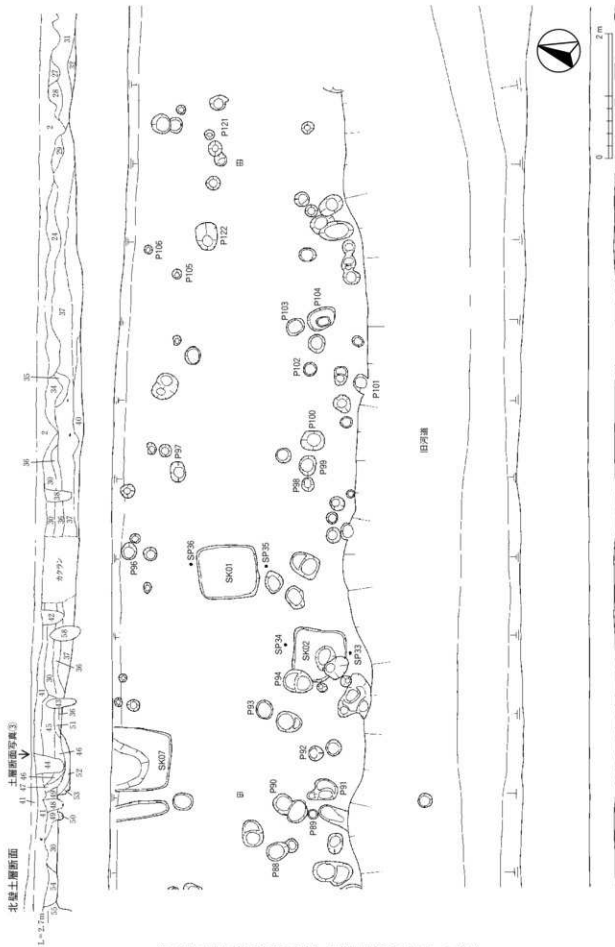
SK07(第9図) 4区に位置し、隅丸方形を呈する。検出高2.4m・1辺95cm以上・深さ6cmを計測する。埋土は地山ブロックを含む黄灰色粗砂を基調とする。人為的に埋め戻された後に掘り返されており、その後黒褐～暗褐色粗砂が堆積する。土層観察の結果、時期は近世以降と判断した。



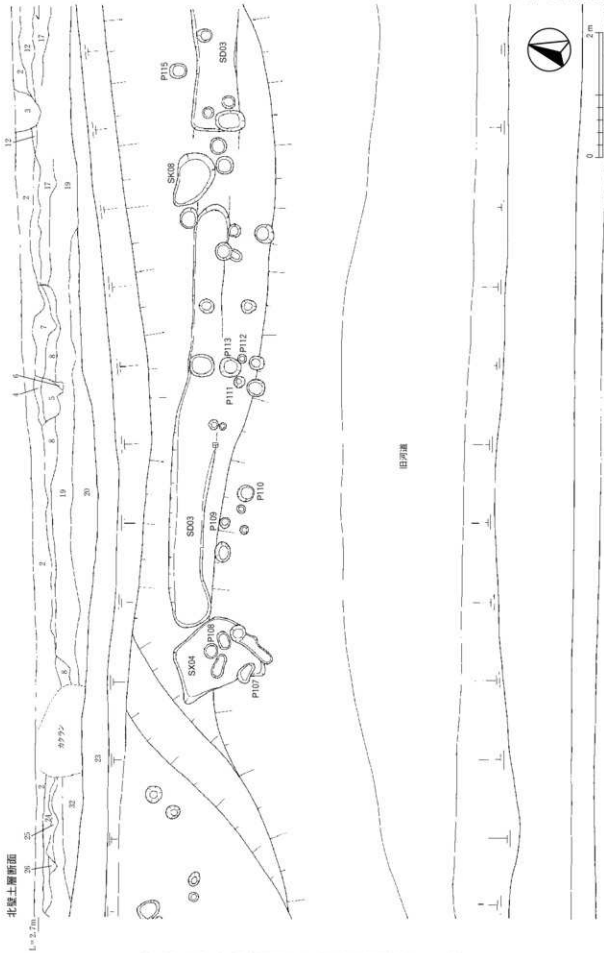
第5図 平成15年度調査区平面図・北壁土層断面図①) (S=1/60)



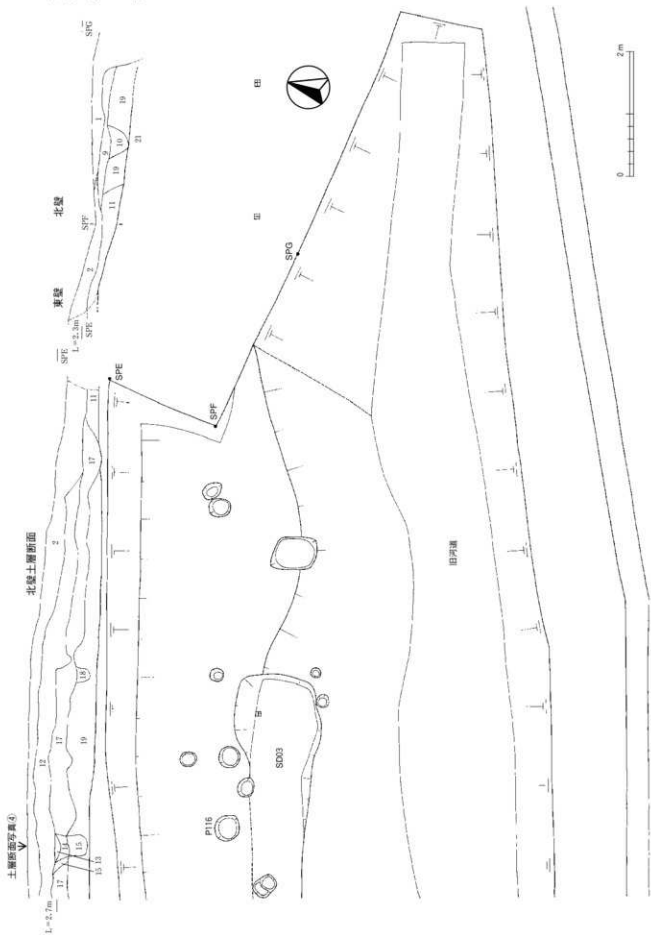
第8図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図2) (S=1/60)



第9図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図(3) (S=1/60)



第10図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図4) (S=1/60)



第11図 平成16年度調査区平面図・北壁土層断面図5) (S=1/60)

平成15年度調査区 北壁土層断面因土色

1. 褐色砂(表土、しまり弱)
2. 明黄褐色砂(地山砂、ブロック状に多混、攪乱層?下部に地山砂が薄く層上に入る)
3. 褐色砂(炭少混)
4. 黄褐色砂
5. 暗褐色砂
6. 黄褐色砂(若干灰色帯びる、SK01埋土)
7. 黄褐色砂(褐色色砂混)
8. 褐色色砂(SK01とは別埋土?平面ではSK01の上層として検出した)
9. 黒褐色砂(SK01埋土、地山砂、土器細片少混)
10. 黒褐色砂(SK01埋土、地山砂多混)
11. 暗褐色砂(SD01埋土、炭少混)
12. 暗褐色砂(SD01埋土、地山砂若干混)
13. 暗褐色砂(SD02埋土、炭、礫少混、11, 12層より若干褐色が強い)
14. 黄褐色砂(4層と同質、若干褐色強い)
15. 黄褐色砂(4層と同質だが地山砂ブロック状に少混)
16. 暗褐色砂(炭少混、地山砂粒状に入る、遺構の可能性有り、他の暗褐色砂より若干暗い)
17. 暗褐色砂(炭、礫、ケイソウ土少混、SD04埋土)
18. 暗褐色砂(地山砂多混、SD02埋土)
19. 暗褐色砂(地山砂多混、SD02とは別の遺構?)
20. 暗褐色砂(炭、土器細片少混、16層より褐色強い)
21. 暗褐色砂(地山砂多混、SK02埋土)
22. 黄褐色砂(SD03埋土、暗褐色色砂混)
23. 褐色砂(16層と同質)
24. 褐~明黄褐色砂(表土、1層より若干暗い、炭少混)
25. 褐色砂(表土、21層と同質だが炭が入る割合が高い)
26. 明黄褐色砂(2層に色相近い、攪乱層?)
27. 褐色砂(3層と同質だが若干黄色を帯びる)
28. 褐~暗褐色砂(所々に地山砂まともに入る、16, 23層の混層に近い)
29. 暗褐色砂(地山砂混)
30. 暗褐色砂(地山砂多混)
31. 褐色色砂
32. 褐色~褐色砂(炭少混)
33. 褐色色砂(炭少混)
34. 黄褐色砂(礫混、攪乱層?)
35. 土にぶい黄褐色砂(炭、地山砂混)
36. 褐色砂(27と同質だが若干灰色帯びる)
37. 褐色砂(炭少混、土器片混)
38. 暗褐色砂(炭少混)
39. 暗褐色砂(炭、地山砂少混)
40. 褐~黄褐色砂
41. 明黄褐色砂
42. 黒褐色砂(炭少混)
43. 黒褐色砂(地山砂多混)
44. 黒褐色砂(地山砂混)
45. 暗褐色砂(地山混)

平成16年度調査区 北壁土層断面因土色

1. カクラン(旧河川埋土、ゴミ混入)
2. 表土(黒褐色砂質土)
3. カクラン
4. 黒褐色砂質土+炭粒混
5. 暗褐色砂質土(弾生土器小片混)
6. 黒褐色砂質土(しまりあり)
7. 暗褐色砂質土
8. 黄褐色砂+暗褐色砂質土ブロック混(畑の閑墾によるカクラン)
9. 暗褐色砂+黄褐色砂(畑の閑墾によるカクラン)
10. 暗褐色砂+炭粒混
11. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック混(地山漸移層)
12. 表土(暗褐色砂質土)弾生土器混入
13. 暗褐色砂
14. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
15. 褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
16. 褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
17. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
18. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
19. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック少混
20. 黄褐色砂+灰黄褐色砂ブロック混(地山漸移層)
21. 黄褐色砂(地山)
22. 黄褐色砂(地山)上面に礫文土器混
23. 灰黄砂(地山)
24. 暗褐色砂質土(表土)
25. 暗褐色砂質土+黄褐色砂(畑の閑墾によるカクラン)
26. 暗褐色砂質土(24層よりやや暗い)
27. 黒褐色砂質土+黄褐色砂ブロック少混
28. 暗褐色砂
29. 暗褐色砂質土+黄褐色砂ブロック混
30. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
31. 黄褐色砂+黄褐色砂
32. 灰黄砂+黄褐色砂ブロック少混
33. 黄褐色砂
34. 黒褐色砂
35. 黒褐色砂+黄褐色砂
36. 黄褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
37. 黄褐色砂(土器片混)
38. 暗褐色砂質土(墓穴)
39. 黄灰色砂+黄褐色砂ブロック混
40. 黄褐色砂+黄灰色砂ブロック多混
41. 暗褐色砂質土(土器片混)
42. 暗褐色砂質土+炭粒混
43. 暗褐色砂質土
44. 暗褐色砂質土
45. 黒褐色砂質土(SK07埋土)
46. 暗褐色砂(SK07埋土)
47. 暗褐色砂+褐色砂(SK07埋土)
48. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
49. 褐色砂
50. 褐色砂+黄灰色砂ブロック多混
51. 暗褐色砂+褐色砂ブロック混
52. 黄灰色砂+黄褐色砂ブロック多混+暗褐色砂ブロック混(SK07埋土)
53. 黄灰色砂+黄褐色砂ブロック少混(SK07埋土)
54. 暗褐色砂
55. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混(墓穴)
56. 暗褐色砂(土器片混)
57. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混

58. 暗褐色砂質土+炭粒
59. 黄褐色砂+褐色砂ブロック混
60. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混+炭粒混(墓穴)
61. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック混(SK04埋土)
62. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混(SK04埋土)
63. 暗褐色砂+炭粒少混(SK04埋土)
64. 暗褐色砂(SK04埋土)
65. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック
66. 暗褐色砂
67. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
68. 暗褐色砂(墓穴)
69. 暗褐色砂
70. 褐色砂
71. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
72. 暗褐色砂+褐色砂ブロック混
73. 暗褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
74. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
75. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
76. 黄褐色砂+褐色砂ブロック多混+黄褐色砂ブロック少混
77. 黄褐色砂+褐色砂ブロック多混
78. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
79. 黄灰色砂+黄褐色砂ブロック多混
80. 暗褐色砂+黄褐色砂
81. 暗褐色砂+炭粒混
82. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
83. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック少混
84. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
85. 暗褐色砂質土
86. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック混
87. 暗褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
88. 暗褐色砂
89. 暗褐色砂
90. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック混
91. 黄褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
92. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
93. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
94. 黄灰色砂+褐色砂ブロック少混
95. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
96. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
97. 褐色砂+黄褐色砂ブロック少混
98. 暗褐色砂+褐色砂ブロック多混
99. 暗褐色砂
100. 暗褐色砂+黄灰色砂ブロック多混
101. 黄褐色砂+黄灰色砂ブロック混(地山)
102. 褐色砂+暗褐色砂ブロック多混
103. 暗褐色砂+黄灰色砂ブロック少混
104. 黄灰色砂+黄褐色砂ブロック混
105. 暗褐色砂
106. 暗褐色砂+黄褐色砂ブロック多混
107. 暗褐色砂+暗褐色砂ブロック多混(SK08埋土)
108. 暗褐色砂+暗褐色砂炭粒多混(SK08埋土)
109. 暗褐色砂+褐色砂ブロック混(SK08埋土)
110. 暗褐色砂+黄灰色砂ブロック少混(SD02埋土)
111. 暗褐色砂+黄灰色砂ブロック多混(SD02埋土)
112. 黄灰色砂+暗褐色砂ブロック混

第2節 遺物

平成15年度出土の土器9点と平成16年度出土の土器・土製品18点、平成14年度に周辺で採集した石製品2点を図化した。石製品は他にも2点出土しており、写真のみ掲載している。また『珠洲市史』に報告された昭和50年度の調査による出土遺物も再録し、必要に応じて追加報告を行う。観察表も編集し直し、新たに観察した点を追加記載したが、30年の間に行方のわからなくなった遺物が若干存在し、空欄となっている項目があることをご容赦願いたい。器種は「～形土器」を省略し、「甕」・「壺」などと呼ぶこととし、調整も「ハケ」・「ナデ」のように「調整」を省略して呼ぶこととする。

土器（第13～18図）

1～8・11～15・25・26は平成16年度、9・10・16～21・24は平成15年度出土土器である。

1～9は縄文土器である。1は磨消縄文を施したのち、縦位の条痕を施した深鉢である。2は平縁の深鉢で、条痕を施したのち、楕円区画文と上方向からの円形刺突文を配している。3・4は波状口縁の深鉢である。3は内湾して立ち上がる波状口縁に沿って沈線が3条施され、波頂部位に下方向から円形凹圧文を2段配する。4は口縁部が内側に屈曲して立ち上がり、波状口縁に沿って刺突文と3条の沈線を廻らす。波頂部位に円形凹圧文と扇状圧痕文を配し、口縁部文様帯の下に縦位の条痕を施している。5は波状口縁の浅鉢である。口縁部は内側に屈曲して反外しつち立ち上がり、3条の太い沈線を直線状に廻らし、中央の沈線は波頂部位で円形凹圧文に寸断される。円形凹圧文は強く押しされ、内側に膨らみが残る。6・7は粗製深鉢である。6は体部に縦位の条痕を施したのち、口縁部に横位の条痕を施す。7は条痕を上から下方向に全面に施す。8は体部外面に縦位のLR単節縄文を施し、底部外面にスタレ状圧痕が残る。9は体部外面に細かいハケ状の条痕を施し、底部外面に網代圧痕が残る。3～5は器形・文様から縄文時代後期中葉の井口Ⅱ式と考えられる。6も野々々町御経塚遺跡で同様のものが井口Ⅱ式と考えられており〔高瀬1989〕、井口Ⅱ式が主体の時期と考えられる。1は磨消縄文が施され、やや古く酒見式と思われる。しかし条痕を施す点で他のものと同様の特徴を示し、外面に条痕を施すことが、酒見式～井口Ⅱ式にかけて、この遺跡において選択されていたと見られる。

昭和50年度の調査では、縄文土器が2点報告されている（第18図142・143）。これらの土器は器形や文様、串田新式に比定される輪島市大沢遺跡第Ⅲ群〔杉島1974〕での出土例から、縄文時代中期終末に近い串田新Ⅱ式に比定されている〔橋本1976〕。しかし、胎土が中期ではなく後期に特徴的なものであり（注1）、また今回報告のものとも似ている点から、酒見式または井口Ⅱ式まで下る可能性が指摘される。

10～21・24～26は弥生時代以降の土器である。10はおそらく弥生時代前期の筒形土器で、横方向の篋描綾杉文を上から下へ施している。体部と底部の接合面にはナデが施される。11は壺の肩部である。内面はハケを施したのち、ナデ上げている。外面はハケの後にミガキを施し、絵画文と見られる篋描文を施している。絵画文は丸みを帯びた線で構成され、鹿とも考えられるが、下半の同心円状の弧線は文様的で、画題は不明である。弥生時代中期後半から後期と考えられる。12は短い有段状の口縁を持つ甕である。頸部下半から体部にかけての外面と頸部内面にハケを施したのち、口縁部内外面にヨコナデを施す。体部内面はケズリを施したのち丁寧なナデが施されている。弥生時代後期後半と考えられる。13は内面にハケを施し、外面に縦方向のミガキを施した蓋である。14は口縁端部を上下に拡張した甕で、外面は口縁部にヨコナデを施したのちハケを施す。内面は頸部にハケを施したのち、口縁部にヨコナデを施している。15は高杯の脚部で、外面はハケののち粗い縦方向のミガキを施し、内

面はハケののちナデを施す。古墳時代中期～後期頃と考えられる。16～18は須恵器である。16は長いかえりを持つ蓋である。17は口縁部が内湾して立ち上がる坏と見られるが、脚が付く可能性がある。18は内湾気味に立ち上がる、甕または壺の口縁部で、外面に沈線が2条施される。19は土師器の椀である。内外面に煤が多く付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。20・21は土師器の小皿で、底部に糸切り痕が残る。口縁部は20が外上方に内湾して立ち上がるのに対し、21は直に立ち上がっている。24・25は珠洲焼の播鉢である。24は口縁端部をやや内側に突き出して肥厚させている。14世紀頃と考えられる。25は1単位の幅2.7cm、11目の卸し目が、底部から上方向へ左回りに施され、底部外面には静止糸切り痕が残る。14世紀後半～15世紀前半と考えられる。26は卸し皿で、全面に黒褐色の釉薬を施している。卸し目は綾杉状の刻みが7段施されており、上段の右肩上がりの刻みは下から上方向へ、下段の右肩下がりの刻みは上から下方向へ施されている。シャモットを含む胎土は27の面戸瓦と似ており、近現代と同じ窯で生産されたと考えられる。

また「珠洲市史」には未記載だが、98の天井部内面・113の底部外面にヘラ記号が見られる。共に欠損しているものの、98は「|」、113は「×」であろうと思われる。また117の外面にも記号または絵画と見られる窠描文が2段施されている。上段は「F」を145度右回転させたものに似ており、下段はほぼ等間隔に描かれた7条の短い縦線に、やや右肩上がりの長い横線を1条交差させたものである。

土製品 (第14・15図)

22・23は平成16年度出土の陶鐘である。22は黒褐色を呈し、中央部で膨らむ。23は円柱状を呈し、赤褐色の釉薬が施されている。昭和50年度の調査でも円柱状の土鐘が3点出土しているが、小さいもので長さ2.5cm、最大幅1.7cm、重さ8g前後、最大のもので長さ3.4cm、最大幅2.2cm、重さ19.7gで小型・円柱状のものが多いようである。27は面戸瓦で、平成16年度の調査で出土したものである。最大幅4.25cm、厚さ1.7cmで、側面や垂直方向の貼り付けが行われている面は、丁寧なナデが施されているが、その裏面は成形時の窠痕や「×」状のナデが残されている。

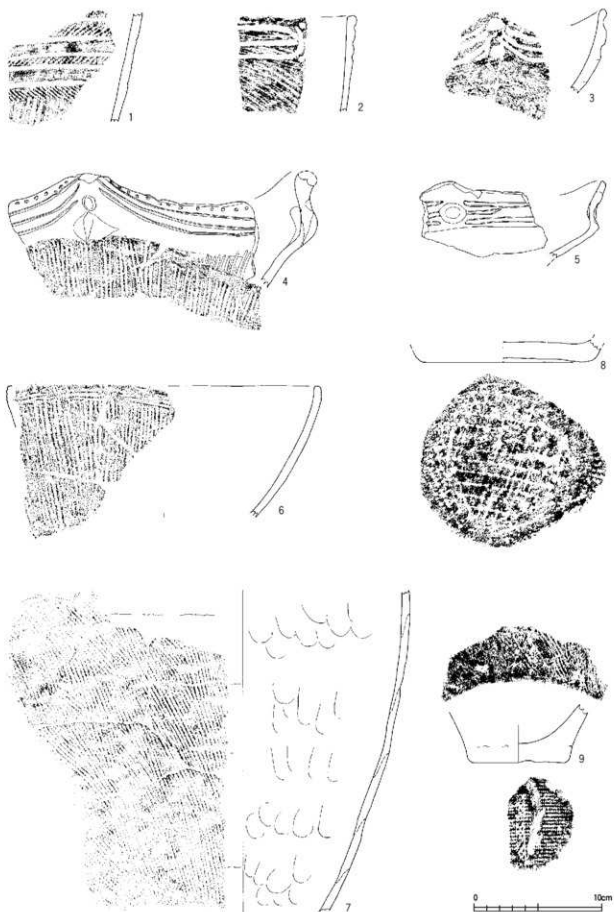
石製品 (第15・18図)

平成14年度に、縄文時代の石器4点が遺跡周辺で表採されている。28は扁平で楕円形の凝灰岩の両端に、刻み目を施した石錘である。29は頁岩の剥片である。30・31は写真のみの報告だが、30は石錘、31は両極剥離剥片である。ともに頁岩と考えられる。昭和50年度の調査では、砂岩の砥石または凹石が1点報告されているが、時期は不明である(144)。

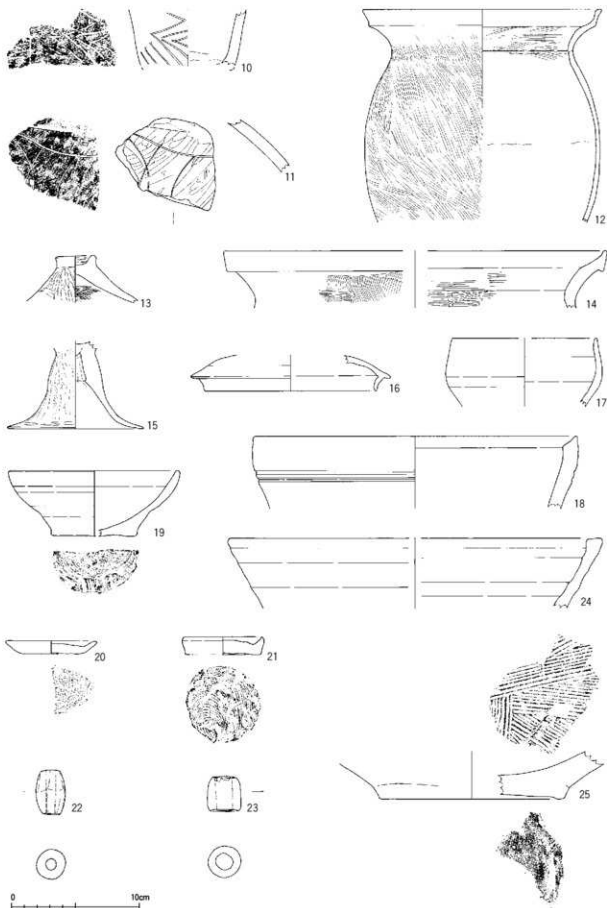
(注1) 西野秀和氏の指摘による。

引用文献

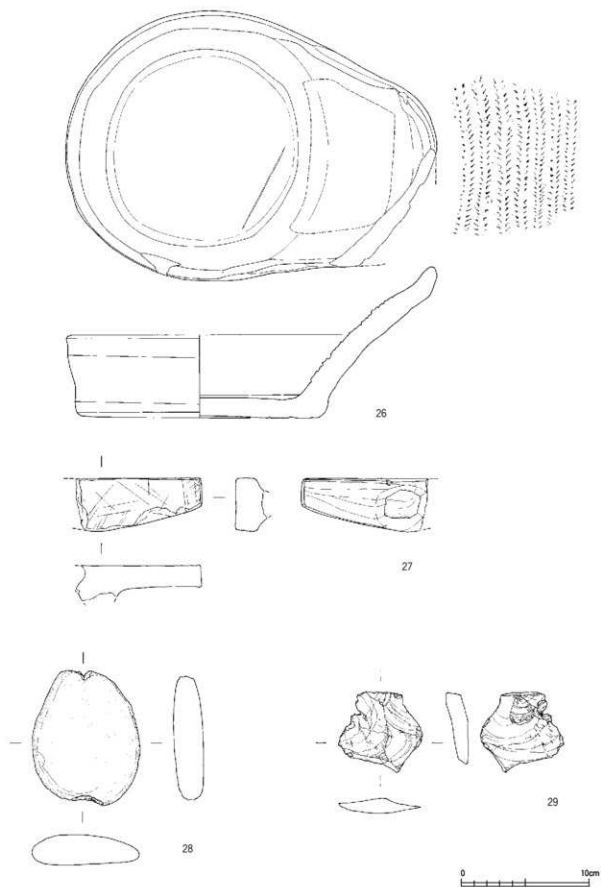
- 杉島孝博 1974 「大沢遺跡」〔輪島市史〕第三巻 資料編 輪島市史編纂専門委員会 12頁
 高橋勝喜 1989 「御経塚遺跡Ⅱ」 野々市町教育委員会
 橋本澄夫 1976 「粟津カンジャバタケ遺跡の調査」〔珠洲市史〕第一巻 資料編 珠洲市史編纂専門委員会 858頁



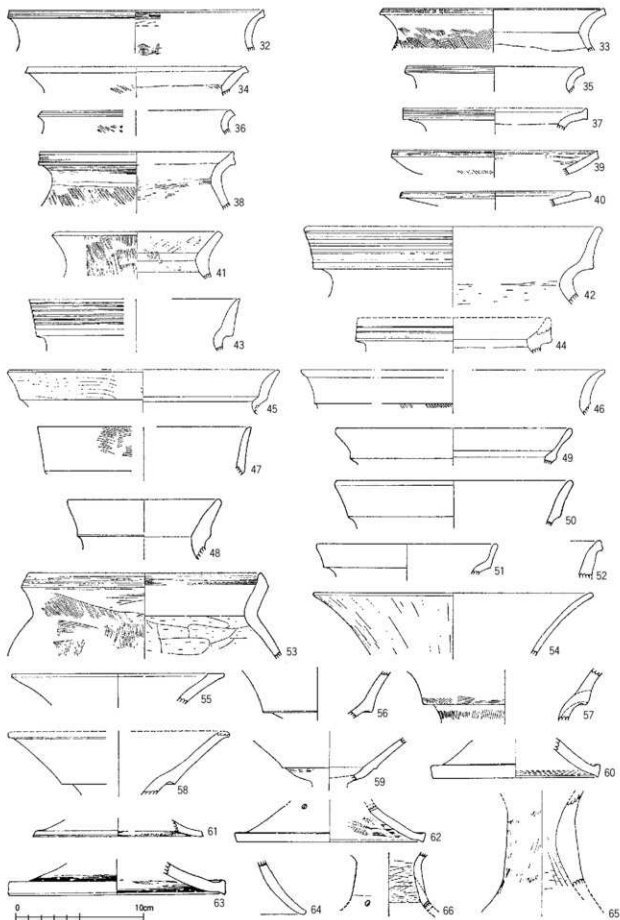
第13図 平成15・16年度調査区出土遺物(1) (S=1/3)



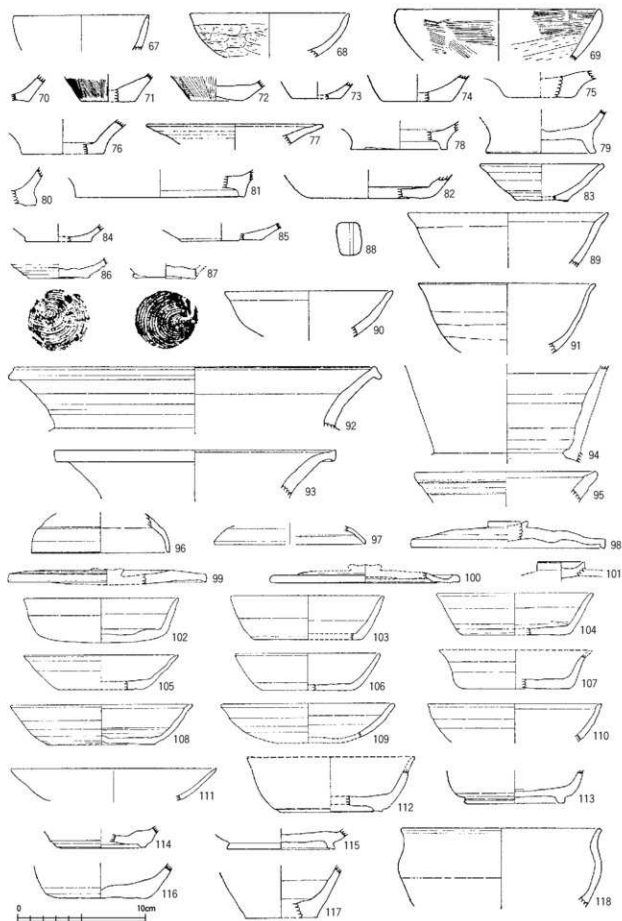
第14図 平成15・16年度調査区出土遺物(2) (S=1/3)



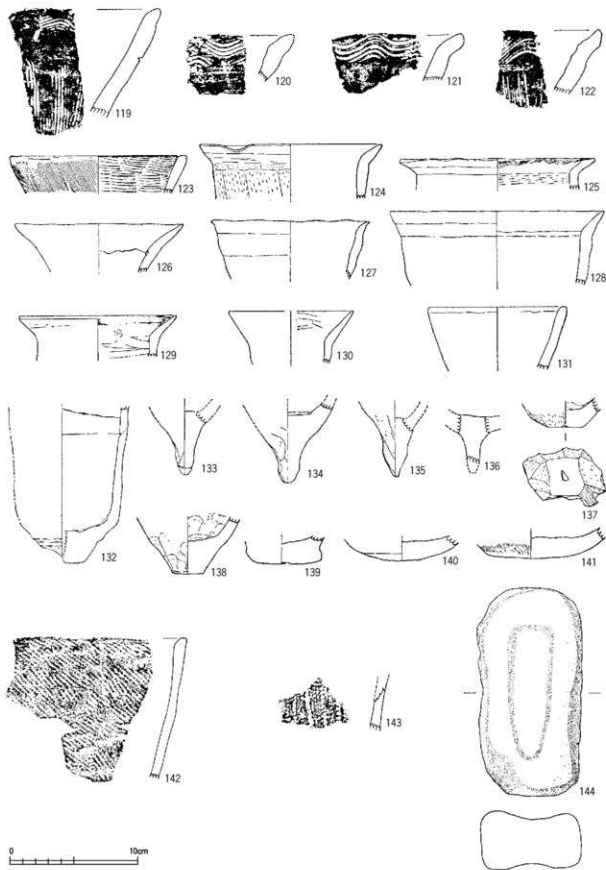
第15図 平成15・16年度調査区出土遺物(3) (S=1/3)



第16図 昭和50年度調査区出土遺物(1) (S=1/3)



第17図 昭和50年度調査区出土遺物② (S=1/3)



第18図 昭和50年度調査区出土遺物③ (S=1/3)

第1表 平成15・16年度出土土器観察表

図号 番号	年度	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径	色顔内面	色顔外面	胎土	調整内面	調整外面	備考	
1	H06	5区 P108	縄文土器	深鉢	—	—	18.0	具	にがい黄褐色	褐色	礫・粗砂多く含む	ナデ	無文・素面		
2	H06	遺構検出	縄文土器	深鉢	—	—	17.0	具	灰白色	にがい黄褐色	礫・粗砂多く、海綿骨針含む	ナデ	無文・素面		
3	H06	遺構検出	縄文土器	深鉢	—	—	17.0	具	浅黄褐色	にがい黄褐色	粗砂・細砂多く、赤色骨針含む	ナデ	無文		
4	H06	遺構検出	縄文土器	深鉢	—	—	18.0	具	にがい黄褐色	褐色	0.5～1.0mm程度の砂粒多く含む	ナデ	無文・素面		
5	H06	遺構検出	縄文土器	深鉢	—	—	18.0	具	褐色	にがい黄褐色	0.2～0.5mm程度の砂粒多く、海綿骨針含む	ナデ	無文・ナデ		
6	H06	5区 S003	縄文土器	深鉢	24.6	—	110.4	具	にがい黄褐色	暗褐色	0.5～1.0mm程度の砂粒多く、海綿骨針含む	ナデ	素面		
7	H06	遺構検出 (河内内)	縄文土器	深鉢	—	—	—	具	褐色 にがい黄褐色	にがい黄褐色	礫少・粗砂粒砂骨中 多、海綿骨針含む	ナデ、腹ナデ、底面 圧痕	素面	体部下半内面 残存	
8	H06	遺構検出	縄文土器	深鉢	—	—	113.6	(1.8)	具	浅黄褐色	灰白色～褐色	粗砂・細砂・海綿骨 針含む	ナデ?腹面残存	無文・ステレ圧痕	
9	H05	木形塚(1)	縄文土器	深鉢	—	—	7.8	(4.7)	具	褐色	浅黄褐色	礫・粗砂多く含む	ナデ	素面・網目圧痕	
10	H05	2区 S006	弥生土器	美形土器	—	—	(4.5)	具	褐色	黄灰色～赤色	蟹殻・細砂・海綿骨 針含む	ロコロナデ	網目文		
11	H06	新保	弥生土器	壺	—	—	(7.7)	具	灰白色	浅黄褐色～赤色	粗砂・細砂・海綿骨 針含む	ハタのちナデ	ハケ線ミガキ・底面文		
12	H06	3区北製5層	土師器	壺	19.0	—	(17.0)	具	にがい黄褐色	にがい黄褐色	3.0mm程度の礫少量、 海綿骨針含む	ヨコナデ、ハケ、ケ ズリ様ナデ	ヨコナデ、ハケ	外周全面残存	
13	H06	赤土師表 (河内内)	弥生土器	壺	—	—	(3.8)	具	浅黄褐色	浅黄褐色	粗砂・赤色骨針・海綿 骨針含む	ハケ	ミガキ		
14	H06	表塚	土師器	壺	130.4	—	(4.5)	具	にがい黄褐色	にがい黄褐色	海綿骨針多く、粗砂 1.0mm程度	ハケ、ヨコナデ	ナデ、ハケ	残存率1/2以下	
15	H06	遺構検出	土師器	高脚	—	—	10.8	(6.9)	具	にがい黄褐色	褐色	1.0mm程度の砂粒多 量、海綿骨針含む	ナデ	ハケ線ミガキ	
16	H05	カクラン	土師器	壺	—	—	13.6	(2.6)	具	灰色	灰色	1.0mm程度の砂粒少 量	ロコロナデ	ロコロナデ	
17	H05	2区カクラン層	土師器	杯	(11.4)	不明	(5.0)	具	灰色	灰色	細砂少量、海綿骨針 含む	ロコロナデ	ロコロナデ		
18	H05	2区カクラン層	土師器	口縁器	25.8	—	(5.7)	具	灰色	灰色	礫・粗砂・細砂少量 含む	ヨコナデ	ヨコナデ、沈線2条	内周面自然剥 残存率1/12	
19	H05	2区 S004(1)	土師器	甗	13.1	6.8	5.2	具	にがい黄褐色	にがい黄褐色	粗砂・海綿骨針・シ ェーモト骨針	ロコロナデ	ヨコナデ (底) 屈曲高脚	内周面残存	
20	H05	1区北製5層	土師器	甗	6.9	6.2	1.0	具	褐色	褐色	粗砂少量・海綿骨針 含む	ロコロナデ	ロコロナデ (底) 高脚		
21	H05	赤土師表 壺2	土師器	甗	6.2	6.0	1.4	具	にがい黄褐色	にがい黄褐色	粗砂少量、海綿骨針・ シェーモト骨針	ロコロナデ	ロコロナデ		
24	H05	2区カクラン層	土師器	深鉢	(26.5)	—	(5.6)	具	灰色	灰色	0.5mm程度の砂粒多 く、海綿骨針含む	ロコロナデ	ロコロナデ		
25	H06	5区 P107	土師器	深鉢	—	—	14.6	(3.6)	具	灰色	灰色	粗砂・細砂多く、部 面残存	ナデ	跡止未切	残存率1/2以下
26	H06	赤土師表 (河内内)	瓦	部じ品	—	—	19.0	(12.0)	具	にがい黄褐色	にがい黄褐色	礫・粗砂・細砂少量 海綿骨針含む	胎面(底面) ナデ、部じ目	胎面(底面) ナデ	外周面人工裏面

第2表 昭和50年度、平成14・16年度出土土製品・石製品観察表

図号 番号	年度	出土地点	器種	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
22	H06	赤土師表	陶片	3.55	2.3	2.35	21.5 孔徑0.5mm
23	H06	赤土師表	陶片	2.8	2.6	2.65	18.0 孔徑1.0mm、胎物、粗砂骨針含む、磨料混入
27	H06	5区 P109	面瓦	4.25	150.0	—	にがい黄褐色、海綿骨針多く、シェーモト骨針
28	H04	表塚	石鏝	10.7	6.95	2.4	279.8 屈曲高脚
29	H04	表塚	削片	6.4	6.95	1.8	50.3 高脚
30	H04	表塚	石鏝	3.4	1.3	0.85	3.16 高脚ナデ
31	H04	表塚	削片	4.9	0.9	1.05	4.77 高脚ナデ
88	S00	AT・練土	土師	2.7	1.8	1.9	10.0 孔徑0.5mm
144	S00	BT	磁石	16.4	8.3	4.7	893.6 砂

第3表 昭和50年度出土土器観察表

図号 番号	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径	色顔	胎土	調整内面	調整外面	備考	残存状況 図面番号	
32	表塚	弥生土器	壺	20.2	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ヨコナデ、ハケ	平行沈線2条、ヨコナ デ、ハケ	外周面残存	第6図-1
33	AT	弥生土器	壺	17.5	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ハケ線状による調整	平行沈線、ハケ	外周面残存	第6図-2
34	AT	弥生土器	壺	17.3	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	外周面残存	第6図-3
35	AT	弥生土器	壺	14.0	—	—	—	良好	反黄褐色	砂粒少	ナデ、ケズリ	平行沈線2条	外周面残存	第6図-4
36	AT	弥生土器	壺	—	—	—	—	良好	反黄褐色	砂粒少	ヨコナデ、ケズリ	平行沈線3条、ヨコナ デ、ハケ	外周面残存	第6図-5
37	AT	弥生土器	壺	14.7	—	—	—	良好	反黄褐色	砂粒少	ナデ	平行沈線6条	外周面残存	第6図-6
38	AT・練土	弥生土器	壺	15.5	—	—	—	良好	褐色	砂粒多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	外周面残存	第6図-7
39	表塚	弥生土器	壺	16.3	—	—	—	良好	暗赤褐色	砂粒少	ハケ	ハケ	外周面残存	第6図-8
40	表塚	弥生土器	不明	15.0	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	発掘後ミガキ	発掘後ミガキ	外周面残存	第6図-9
41	AT	弥生土器	壺	—	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ハケ、ナデ	ハケ	外周面残存	第6図-10
42	AT・表塚	弥生土器	壺	23.3	—	—	—	良好	暗灰褐色	砂粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	平行沈線、ヨコナ デ	外周面残存	第6図-11
43	AT	弥生土器	壺	—	—	—	—	良好	褐色	砂粒多	ナデ、ケズリ	屈曲高脚	外周面残存	第6図-12
44	AT・練土	弥生土器	壺	—	—	—	—	良好	褐色	砂粒少	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナ デ	外周面残存	第6図-13
45	AT・練土	弥生土器	壺	21.3	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒多	ヨコナデ	屈曲高脚5条、ヨコナ デ	外周面残存	第6図-14
46	AT	弥生土器	壺	15.5	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒多	ナデ	ナデ、ハケ	外周面残存	第6図-15
47	AT	土師器	壺	—	—	—	—	良好	褐色	砂粒少	ナデ	ハケ	外周面残存	第6図-16
48	AT	土師器	壺	12.2	—	—	—	不真	にがい黄褐色	砂粒多	ハケ線ミガキ	ミガキ、ナデ	骨ナ	第7図-17
49	AT・練土	土師器	壺	18.7	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ハケ	ハケ	内周面残存	第7図-18
50	AT	土師器	壺	19.8	—	—	—	良好	浅黄褐色	塊状	ミガキ	ミガキ	外周面残存	第7図-19
51	AT	弥生土器	壺	14.2	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒多	ヨコナデ	ヨコナデ、ナ デ	外周面残存	第7図-20
52	AT	弥生土器	壺	—	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒少	ヨコナデ	ヨコナ デ	外周面残存	第7図-21
53	AT	弥生土器	壺	18.6	—	—	—	良好	にがい黄褐色	砂粒多	ナデ、ケズリ	網目ハシ状溝(横数 10線、ナデ線ナ デ)	外周面残存	第7図-22

第2節 遺 物

図説番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	器高	底径	底色	色調	胎土	調整内面	調整外面	備考	図録掲載	
54	AT	土師器	平皿	22.2	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ミナキ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-23	
55	AT	弥生土師	平皿	17.0	—	—	—	良好	—	—	ミナキ	ナナ	高杉土	第7図-24	
56	AT	土師器	平皿	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ミナキ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-25	
57	BT	弥生土師	高杯	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ナナ	ナナ、ハケ	高杉土は磨面	第7図-26	
58	BT・練土	弥生土師	高杯	—	—	—	—	良好	赤褐色	精練	ミナキ	ハケ、ミナキ	磨面土は磨面 内面磨面	第7図-27	
59	弥生	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	褐色	精練	ほこミナキ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-28	
60	弥生	弥生土師	平皿	—	13.2	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ナナ	ハケ、ミナキ	高杉土は磨面	第7図-29	
61	AT	弥生土師	平皿	—	7.7	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ナナ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-30	
62	弥生	弥生土師	平皿	—	14.9	—	—	良好	明褐色	精練	ナナ、ハケ	ハケ、ミナキ	高杉土は磨面	第7図-31	
63	AT・練土	弥生土師	平皿	—	17.4	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	不明	不明、ナナ	高杉土は磨面	第7図-32	
64	弥生	弥生土師	平皿	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	不明	ミナキ	高杉土は磨面	第7図-33	
65	弥生	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ケズリ	ハケ、ミナキ	高杉土は磨面	第7図-34	
66	AT・練土	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ミナキ、ケズリ	ミナキ	高杉土は磨面	第7図-35	
67	AT	土師器	高杯	10.8	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ミナキ	ほこナナ	内面褐色	第7図-36	
68	AT	土師器	高杯	12.7	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ミナキ	ほこナナ、ケズリ	内面褐色	第7図-37	
69	AT	土師器	高杯	16.2	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ハケ、ほこナナ	ハケ	高杉土は磨面	第7図-38	
70	弥生	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	—	—	—	—	高杉土は磨面	第7図-39	
71	弥生	土師器	高杯	—	4.3	—	—	良好	暗灰褐色	砂粒多	瓶ナナ	ハケ	内面磨面	第7図-40	
72	AT	土師器	高杯	—	4.2	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	瓶ナナ	ハケ	内面磨面	第7図-41	
73	弥生	土師器	高杯	—	3.9	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒	ミナキ	ナナ	外面磨面	第7図-42	
74	AT・練土	土師器	高杯	—	3.9	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒多	ナナ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-43	
75	AT・練土	土師器	高杯	—	5.5	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒多	ハケ	不明	高杉土は磨面	第7図-44	
76	AT	土師器	高杯	—	6.6	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒	不明	ケズリ	高杉土は磨面	第7図-45	
77	AT	土師器	高杯	11.3	—	—	—	良好	淡茶褐色	磨面	不明	不明	高杉土は磨面	第7図-46	
78	AT	土師器	高杯	—	7.7	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒	不明	不明	高杉土は磨面	第7図-47	
79	AT	土師器	高杯	—	3.7	—	—	良好	茶褐色	磨面	ナナ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-48	
80	BT	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	赤褐色	砂粒少	ミナキ	ナナ	磨面	第7図-49	
81	AT	土師器	高杯	—	13.5	—	—	良好	淡茶褐色	磨面	高杉土は磨面	不明	磨面、ケズリ	高杉土は磨面	第7図-50
82	AT	土師器	高杯	—	10.0	—	—	良好	暗灰色	砂粒少	ナナ	ナナ	磨面	第7図-51	
83	AT	土師器	高杯	5.6	4.2	2.8	—	良好	茶褐色	砂粒少	ナナ	ナナ	磨面、瓶ナナ	第7図-52	
84	AT	土師器	高杯	—	5.2	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒多	不明	磨面、瓶ナナ	高杉土は磨面	第7図-53	
85	AT	土師器	高杯	—	6.5	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒	高杉土は磨面	不明	磨面	第7図-54	
86	AT	土師器	高杯	—	4.7	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒	高杉土は磨面	不明	磨面	第7図-55	
87	AT・練土	土師器	高杯	—	4.8	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒	不明	不明	磨面	第7図-56	
88	AT	土師器	高杯	—	4.9	—	—	良好	茶褐色	磨面	ナナ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-57	
89	AT	土師器	高杯	16.0	—	—	—	良好	茶褐色	磨面	ナナ	ナナ	高杉土は磨面	第7図-58	
90	AT	土師器	高杯	13.4	—	—	—	良好	茶褐色	砂粒多	高杉土は磨面	不明	口磨面・内面磨面	第7図-59	
91	AT	土師器	高杯	14.1	—	—	—	良好	灰色	磨面	高杉土は磨面	不明	高杉土は磨面	第7図-60	
92	AT	土師器	高杯	26.5	—	—	—	良好	じいい黄褐色	磨面	ナナ	ナナ	内面に緑色自然釉	第7図-61	
93	AT	土師器	高杯	22.2	—	—	—	良好	灰色	磨面	ナナ	ナナ	口磨面・内面磨面	第7図-62	
94	AT	土師器	高杯	—	—	—	—	良好	灰色	磨面	ナナ	ナナ	磨面(口径磨面11.5cm 内面褐色自然釉)	第7図-63	
95	AT・覆土	土師器	平皿	14.4	—	—	—	良好	暗灰褐色	磨面	ナナ	ナナ	磨面	第7図-64	
96	AT・練土	土師器	平皿	11.0	—	—	—	良好	灰褐色	磨面	ナナ	ナナ	外面褐色	第7図-65	
97	AT	土師器	平皿	—	—	—	—	良好	灰色	磨面	ナナ	ナナ	ナナ、ミナキ、磨面、ハケナナ	第7図-66	
98	AT	土師器	平皿	15.3	—	—	—	良好	灰褐色	砂粒	不明	不明	表面自然釉	第7図-67	
99	AT	土師器	平皿	15.0	—	—	—	良好	暗灰色	精練	不明	不明	磨面	第7図-68	
100	AT	土師器	平皿	15.7	—	—	—	良好	灰色	磨面	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	第7図-69	
101	AT	土師器	平皿	—	—	—	—	良好	灰色	磨面	ナナ	ナナ	磨面	第7図-70	
102	AT	土師器	平皿	12.3	10.0	3.5	—	良好	黄灰色	磨面	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	第7図-71	
103	AT・練土	土師器	平皿	12.1	16.7	3.5	—	良好	黄褐色	砂粒少	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	第7図-72	
104	AT・練土	土師器	平皿	12.3	16.3	3.3	—	良好	黄褐色	砂粒少	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	第7図-73	
105	AT	土師器	平皿	12.3	6.5	2.7	—	不良	灰白色	磨面	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	口磨面・内面磨面	第7図-74
106	AT	土師器	平皿	11.3	7.3	2.9	—	良好	灰白色	磨面	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	第7図-75	
107	AT	土師器	平皿	12.0	6.5	3.1	—	不良	灰褐色	砂粒	ナナ	ナナ	磨面	第7図-76	
108	AT	土師器	平皿	14.5	6.6	3.1	—	不良	灰白色	砂粒多	ナナ	ナナ	磨面、瓶ナナ	第7図-77	
109	AT	土師器	平皿	13.8	—	—	—	不良	茶褐色	砂粒	ナナ	ナナ	磨面、瓶ナナ	第7図-78	
110	AT・練土	土師器	平皿	13.7	—	—	—	—	—	—	ナナ	ナナ	磨面	第7図-79	
111	AT・覆土	土師器	平皿	16.3	—	—	—	良好	暗灰褐色	砂粒少	ナナ	ナナ	磨面	第7図-80	
112	AT	土師器	平皿	—	8.1	—	—	良好	灰褐色	砂粒多	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	磨面	第7図-81
113	AT・覆土	土師器	平皿	—	8.4	—	—	良好	灰色	精練	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	磨面	第7図-82
114	AT	土師器	平皿	—	7.8	—	—	良好	灰色	精練	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	磨面、瓶ナナ	第7図-83
115	AT・覆土	土師器	平皿	—	7.0	—	—	良好	茶褐色	砂粒多	ナナ	ナナ	磨面	第7図-84	
116	AT	土師器	平皿	—	7.5	—	—	良好	灰褐色	砂粒多	ナナ	ナナ	ヘラケナナ	磨面	第7図-85
117	AT・覆土	土師器	平皿	—	5.5	—	—	良好	黄灰色	精練	ナナ	ナナ	磨面	第7図-86	
118	BT・練土	土師器	平皿	15.9	—	—	—	良好	灰色	精練	ナナ	ナナ	磨面、瓶ナナ、1cm 内面褐色自然釉	第7図-87	
119	練土	土師器	平皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨面	第7図-88	
120	練土	土師器	平皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨面	第7図-89	
121	練土	土師器	平皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨面	第7図-90	
122	練土	土師器	平皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨面	第7図-91	
123	BT・練土	土師器	瓶口土師	14.4	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	ハケ	ハケ	磨面	第7図-92	
124	BT・練土	土師器	瓶口土師	14.6	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒多	ナナ	ナナ	磨面	第7図-93	
125	BT	土師器	瓶口土師	15.8	—	—	—	良好	灰褐色	砂粒少	ハケ、ナナ	ナナ	磨面	第7図-94	
126	BT	土師器	瓶口土師	13.7	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ハケ、ナナ	ナナ	磨面	第7図-95	
127	BT	土師器	瓶口土師	12.6	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ハケ、ナナ	ナナ	磨面	第7図-96	
128	BT	土師器	瓶口土師	17.2	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒少	ナナ	ナナ	磨面	第7図-97	
129	AT	土師器	瓶口土師	12.6	—	—	—	良好	淡茶褐色	砂粒少	磨面	不明	磨面	第7図-98	
130	BT・練土	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	砂粒多	ハケ、ナナ	ナナ	磨面	第7図-99	
131	AT	土師器	瓶口土師	11.2	—	—	—	良好	褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-100	
132	AT	土師器	瓶口土師	—	1.6	—	—	良好	褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-101	
133	AT	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-102	
134	AT・練土	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	黄褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-103	
135	AT・練土	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-104	
136	AT・練土	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	淡茶褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-105	
137	AT	土師器	瓶口土師	—	2.6	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	磨面	不明	磨面	第7図-106	
138	AT	土師器	瓶口土師	—	2.6	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	磨面	不明	磨面	第7図-107	
139	練土	土師器	瓶口土師	—	5.1	—	—	良好	褐色	砂粒少	不明	不明	磨面	第7図-108	
140	AT	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	褐色	砂粒多	不明	不明	磨面	第7図-109	
141	AT	土師器	瓶口土師	—	—	—	—	良好	じいい黄褐色	精練	不明	不明	磨面	第7図-110	
142	BT	練文土師	深鉢	—	—	—	—	良好	明褐色	砂粒多	不明	不明	磨面	第7図-111	
143	AT	練文土師	深鉢	—	—	—	—	良好	明褐色	砂粒多	不明	不明	磨面	第7図-112	

第5章 まとめ

検出遺構の検討 平成15年度調査区で検出した溝は流路の方向から2種類に分けられる。溝底の傾斜から判断して、SD01・04・06・08・09は北東→南西で、SD05・07・10は東→西へと深くなる。当初は畝溝と想定していたが、深くてしっかりとした掘方をもつものも少なくない。だが、遺構の性格を捉えるまでには至らなかった。切合いによる前後関係はSD03・09→SD04・05・07・08→SD06の順となる。平成16年度調査区で検出した土坑(SK01・02・04・07)は、出土した骨片と調査区壁の土層から判断して中・近世の土坑墓と考える。出土した骨片は細片であり、種類の特定には至らなかった。上端の形状は隅丸方形で、やや凹凸のある平坦気味の坑底に仕上げられる。SK07の断面から判断して、壁面はまっすぐ上方に立ち上がるものと想定できる。遺構の形状に何らかの規格性を窺える。

集落域と変遷 本遺跡は平成15・16年度調査以外にも、昭和50年度に石川考古学研究会と金沢大学考古学研究会が主体となって発掘調査が行われている。それらの成果を加味しつつ説明を加えていく。

昭和50年度の調査では、調査区土層で観察した厚い砂層の堆積と製塩土器の出土を根拠に遺跡が往時、海岸砂丘上に立地していたとの見解がなされ、それは平成15・16年度の調査でも確認できた。集落跡の範囲であるが、平成15・16年度の遺構検出状況から判断して、現実津集落の下に集落跡が複合しているというよりは、むしろ遺跡の立地する旧海岸砂丘上に展開していたものと考えられる。検出した時期不詳の小穴群全てに柱穴・攪乱穴の区別をすることは困難であったとしても、全て攪乱穴とするには無理があり、したがって柱穴の可能性を含めておく方が妥当と考えた。

平成15・16年度調査の検出面で捉えた遺構から出土した遺物は僅少であった。調査区壁土層を観察した結果、耕土から下の層は検出面に至るまで時期の異なる遺物を包含しており、層序にかなりの混乱が見られた。これは長期間にわたって厚い粗砂層が幾度となく堆積したことによるものと考えられ、各層が生活面を構成していたかどうかの厳密な判断はつかなかった。つまり本遺跡で出土した遺物を層位によって時期推定することは容易でなく、したがって出土した遺物を基に遺跡の変遷をたどる方が妥当と判断した。以下の()内の数字は遺物の報告番号を示す。

縄文時代では後期の深鉢(1～9)が出土している。弥生～古墳時代では弥生時代前期の筒形土器(10)と中～後期の壺(11)、後期～古墳時代前期の甕(12・14、32～53)・蓋(13)・壺(57)・高杯(54～56、59～63)・器台(58・65・66)・底部(70～76)が出土した。古墳時代中期～末期では土師器の高杯(15)や須恵器の蓋(16・96・97)が出土している。古代では奈良時代～平安時代前半の杯(102～104、106・107・112～115)、平安時代後半では土師器の碗(19・78・79、83～87)、須恵器の甕(92)・壺(93・94)・蓋(98～101)・杯(105・108～111)の他、製塩土器(123～141)が出土した。中世では室町時代の珠洲焼の播鉢(119～122)が出土している。小片で未図化だが、近世では伊万里の碗・皿が出土し、近・現代では卸し皿(26)や産地不明の陶磁器が出土した。

以上、縄文時代後期から現代に至るまで長期間にわたり本遺跡は営まれてきたことが窺える。集落跡としての盛期は遺物の出土量から判断して、弥生時代後期～古墳時代前期と平安時代後半である。

報告書抄録

ふりがな	すずし あわづかんじゃばたけいせき							
書名	珠洲市 粟津カンジャバタケ遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（粟津川地区）に係る埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安中哲徳、谷内明央、森山佳、稲垣淳平							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あわづ 粟津カンジャ バタケ遺跡	いしのかほにす 石川県珠 すずし、みさほ 洲市三崎 まちあわづ 町粟津	172057	05171	37度	137度	20031014 ～ 20031107	200㎡	県営ほ場整 備事業(粟 津川地区)
				28分 54秒	20分 9秒	20040427 ～ 20040531		
				580㎡				
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
粟津カンジャ バタケ遺跡	集落	縄文	小穴、溝		縄文土器、石器		縄文時代の集落跡。	
	集落	弥生～ 古墳	掘立柱建物柱穴、土坑、 小穴、溝		弥生土器、土師 器		弥生時代～古墳 時代にかけての 集落跡。	
	集落	古代～ 中世	掘立柱建物柱穴、土坑、 小穴、溝		土師器、須恵器、 珠洲焼、鉄製品		古代～中世にか けての集落跡。	
	墓地	中世～ 近世	溝、土坑墓		土師器、珠洲焼、 陶磁器		中世～近世の墓 地跡。	
要約	<p>遺跡は河口から約400m離れた川岸に位置し、標高1.8m～2.4m代を測る砂丘上に立地している。旧河道のベースとなる砂層上で検出された小穴や溝から、縄文時代後期の土器が出土しているが、建物跡は確認されていない。</p> <p>また、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての掘立柱建物柱穴や土坑、溝等から弥生土器や土師器等が出土しているほか、古代～中世の掘立柱建物柱穴や土坑、溝等も多数検出され、土師器、須恵器、珠洲焼等が出土していることから、周辺に集落が広がっていたと考えられる。他に、中世～近世の方形の土坑が検出されており、土坑墓と考えている。</p>							



遺構検出状況 (西から)



遺跡発掘状況 (西から)

図版 2 (平成15年度調査区②)



道構検出状況 (東から)



道路完備状況 (東から)

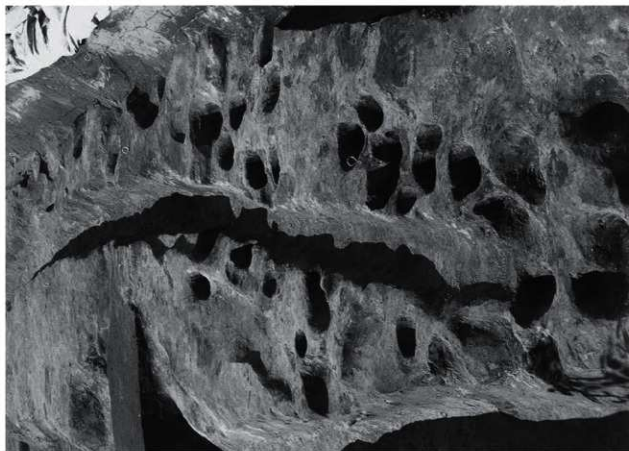


SD01・02完掘状況 (南西から)



SD07完掘状況 (東から)

図版 4 (平成15年度調査区4)



SD05年現状 (裏から)



SD10年現状 (裏から)



調査区北壁土層断面 (南東から)



SD03~09検出状況 (東から)



SD04遺物出土状況 (北から)



SK01完掘状況 (北から)



SK01土層断面 (南から)

図版 6 (平成15年度調査区 6)



SD01・02土層断面 (南から)



SD05-06切合い土層断面 (西から)



SD05土層断面 (西から)



調査区北壁土層断面① (南から)



調査区北壁土層断面② (南から)



調査区北壁土層断面③ (南から)



調査区北壁土層断面④ (南から)



調査区北壁土層断面⑤ (南から)

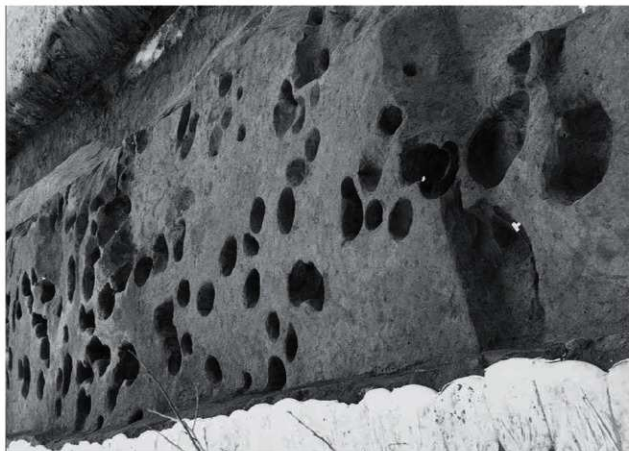


道跡完掘状況 (東から)



道跡完掘状況 (南西から)

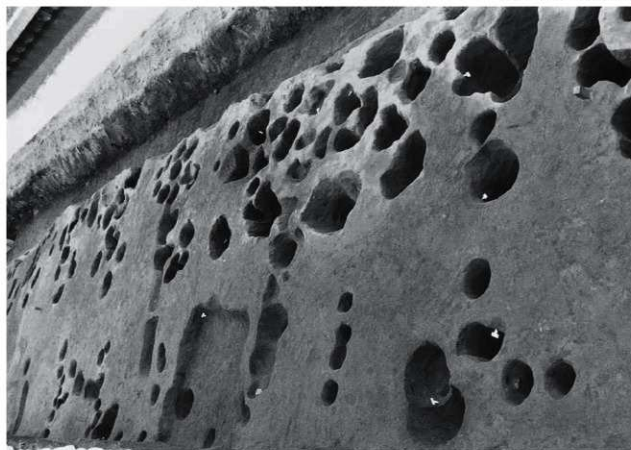
図版 8 (平成16年度調査区2)



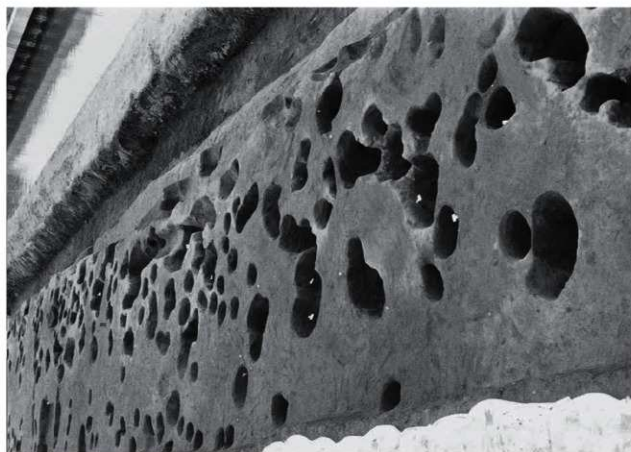
1区突眼状況(西から)



浦野突眼状況(西から)



3区空堀状況 (西から)



2区空堀状況 (西から)

図版10 (平成16年度調査区4)



5～7区実態状況(西から)



4区実態状況(西から)



遺構検出状況 (西から)



P01土層断面 (北西から)



P02土層断面 (東から)



P04土層断面 (南西から)



P05土層断面 (西から)



P06土層断面 (北西から)



P07土層断面 (北から)



P08土層断面 (北東から)



P09・46土層断面 (北東から)



P09・46完掘状況 (北から)



P10土層断面 (南西から)



P11土層断面 (北から)



P12土層断面 (北東から)



P13土層断面 (北から)



P14土層断面 (北から)



P16土層断面 (西から)



P17土層断面 (西から)



P35土層断面 (東から)



SK01検出状況 (南から)



SK01土層断面 (東から)



SK02検出状況 (西から)



SK02土層断面 (東から)



SK01・02掘削作業風景 (東から)



SK03土層断面 (西から)



SX01土層断面 (西から)



SX03-SK05-SD01切合い土層断面 (西から)



SX03・SD01周辺完掘状況 (北西から)



SX02土層断面 (西から)



調査区北壁土層断面① (南から)



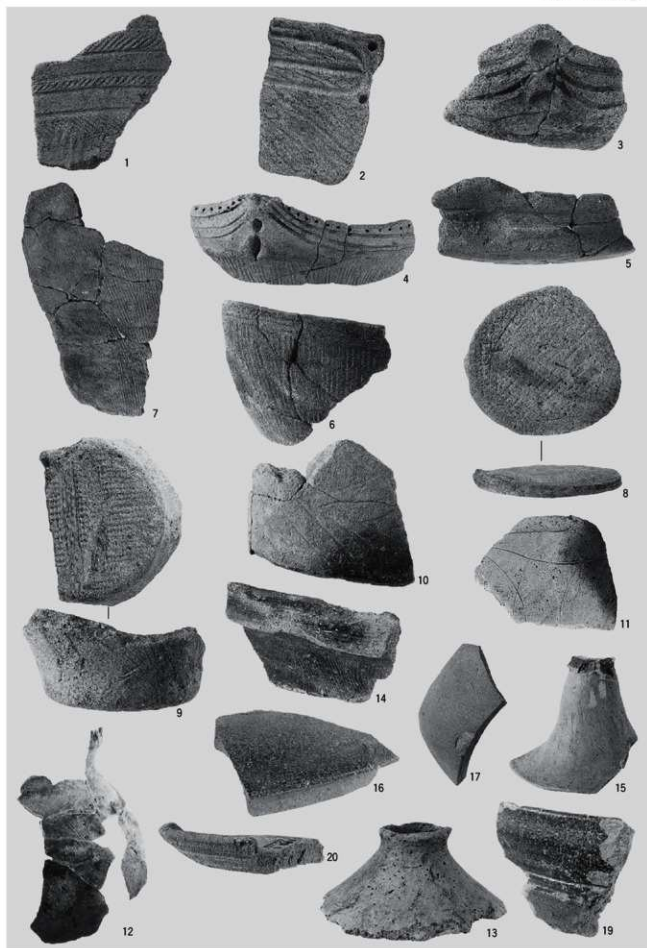
調査区北壁土層断面② (南から)

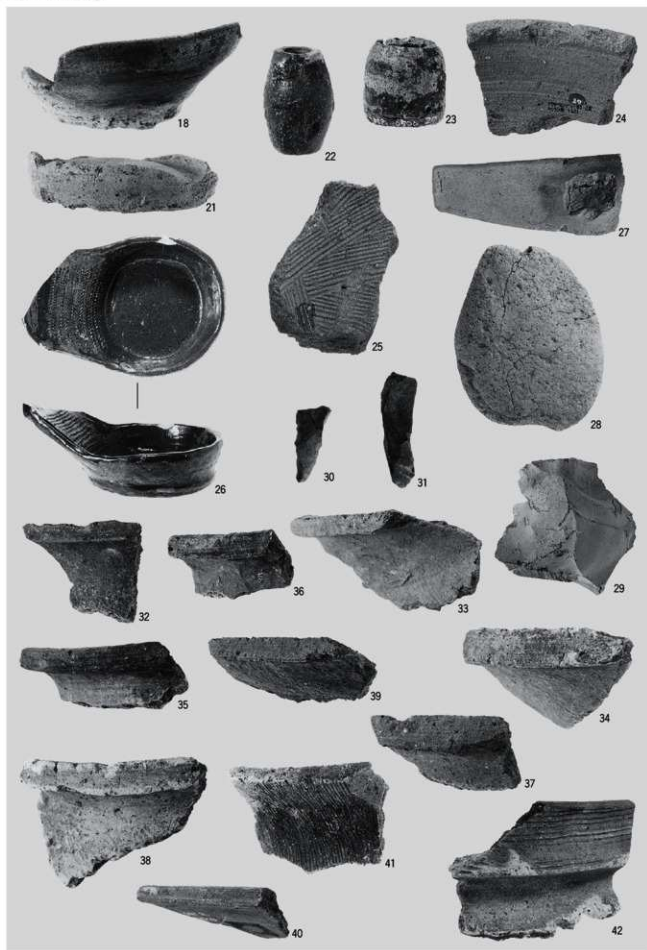


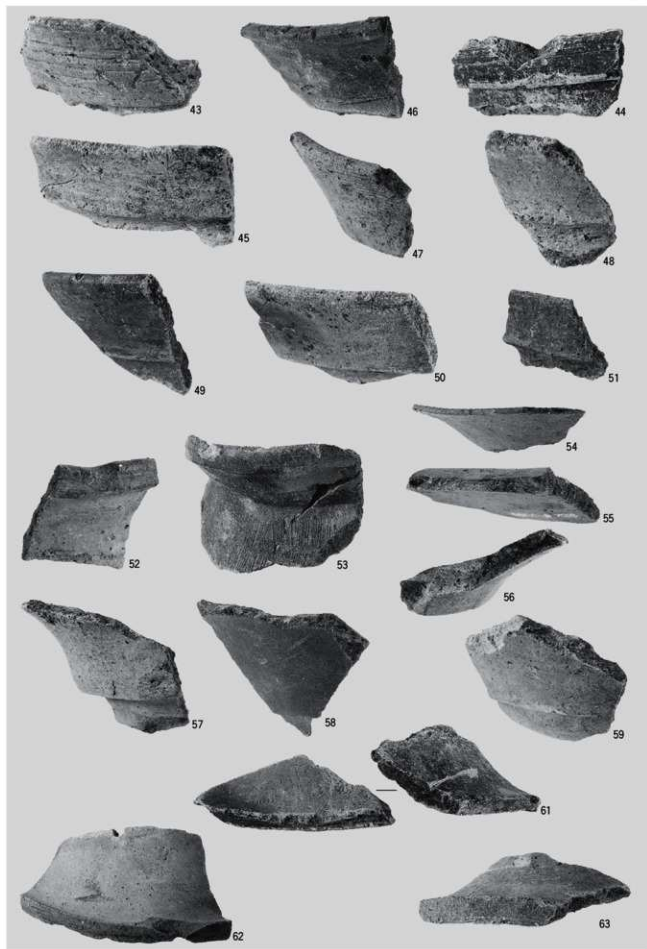
調査区北壁土層断面③ (南から)



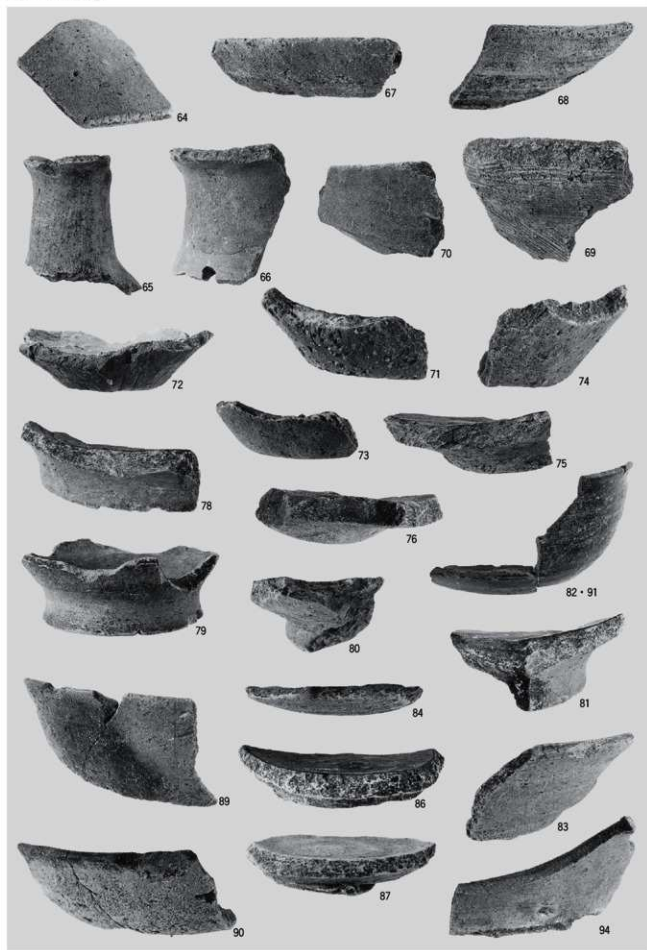
調査区北壁土層断面④ (南から)

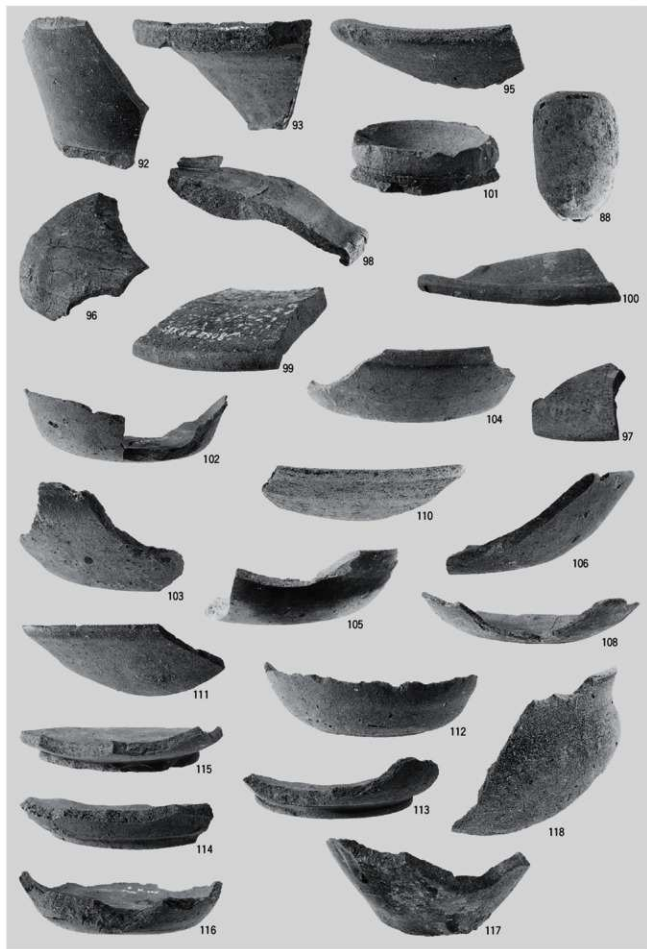


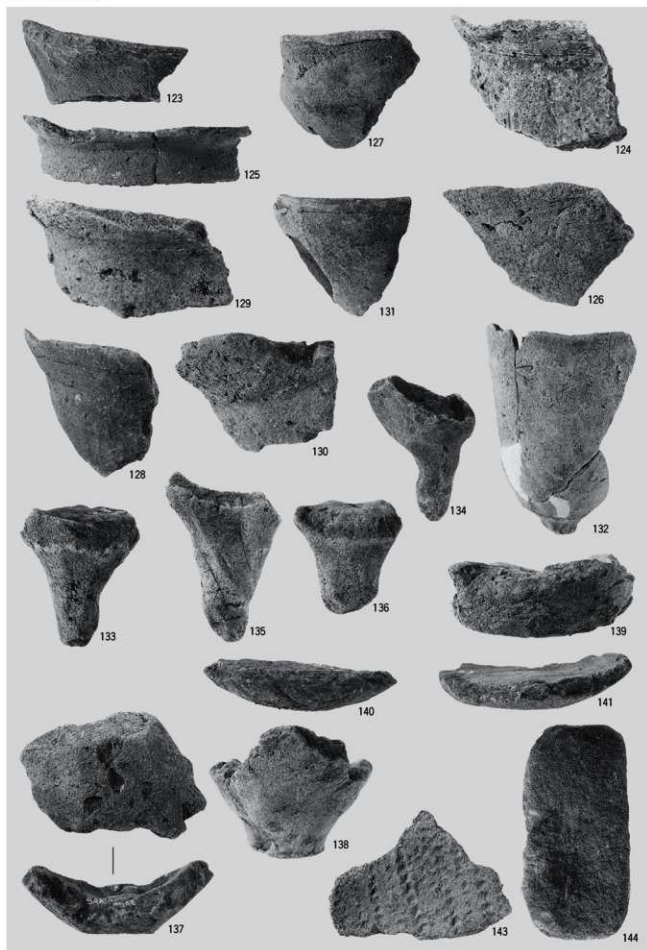




图版18 (出土遺物4)







珠洲市 粟津カンジャバタケ遺跡

発行日 平成18年3月31日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社ショセキ